

口頭説明場面における説明方略の選択に関する検討

—説明対象・説明内容・説明メタ認知能力の観点に基づく比較—

辻 義人

(小樽商科大学 教育開発センター)

説明のわかりやすさに対する注目が高まっている。教育場面において、説明活動は主に国語教育の枠組みから研究や指導が行われてきた。しかし、説明活動に関する研究は、決して十分ではなかった。このなかでも、辻(2008)は、わかりやすい説明文の作成に必要な要素として、読み手の「目的」「知識」「読解力」に注目する必要があることを主張した。また、説明文と口頭説明との違いについて、口頭説明場面では、説明者は説明の受け手から手掛かりを獲得できること、さらに、対話を継続することによって、より多くの手掛かりが得られることを指摘している。

ここで、口頭説明場面における説明者に求められる要素として、説明内容(手続き的知識・宣言的知識)と説明メタ認知能力が注目された(辻, 2009)。検討結果より、説明メタ認知能力の高い説明者は、説明の受け手に合わせて適切な説明方略を選択していることが示された。本研究では、口頭説明のわかりやすさに関連する要素として、説明内容と説明メタ認知能力に加え、説明対象(子ども対象・成人対象)に注目する。これらの要因によって、説明者の説明方針(説明方略)はどのように異なるのか、探索的検討を行った。

【方法】

調査時期・対象:2010年11月に調査を実施した。対象は、北海道のA国立大学の学生234名であった。**調査手続き:**学生に調査票の配布と回収を行った。調査票の構成は、(1)フェイスシート、(2)口頭説明におけるメタ認知尺度(辻, 2009)、(3)各説明場面における説明方略の重要度評定であった。なお、(3)各説明場面における説明方略の重要度評定では、説明内容と説明対象ごとに4場面を設定し、各場面において重要と考えられる説明方略を5件法で回答するものであった。なお、いずれの場面においても、説明の聞き手は説明内容について初学者であることを教示した。説明方略は、以下の9項目であった。①結果や因果関係を明確にすること、②聞き手の疑問や不安を予測し配慮すること、③前もって失敗事例を伝えておくこと、④具体例や例え話を使うこと、⑤できるだけ多くの情報を伝えること、⑥説明のための説明(メタ説明:これから〇〇について説明します、など)、⑦必要なことだ

けを精選して伝えること、⑧難しい専門用語を避けること、⑨相手が聞き取りやすいように話すこと。分析では、二要因に対応のある三要因分散分析を行った。

【結果と考察】

(1)説明対象と説明内容による説明方略の違い

説明対象による違いに注目すると、説明対象が成人のとき「①結果や因果関係の明確化」「③失敗事例の事前伝達」「⑤十分な情報量」が重視されていた。一方、説明対象が子どものとき「④具体例や例え話の利用」「⑦情報の精選」「⑧専門用語を避けること」が重視されていた。説明対象によって、重視される説明方略には違いが見られることが示された。次に、説明内容による違いに注目すると、手続き的知識のときに「③失敗事例の事前伝達」が重視されていた。一方、宣言的知識のとき「⑥メタ説明の利用」「⑦情報の精選」など、複数の説明方略が重視されていた。この結果は、説明内容によって重視される説明方略が異なることを示している。

(2)説明メタ認知能力の高低間における比較

説明メタ認知能力の観点から説明方略の重要度評定値の比較を行った。その結果、全ての説明方略において、説明メタ認知能力高群の重要度評定値が高かった。この結果は、説明メタ認知能力高群は説明方略の重要性を理解していることを示す。

(3)説明方略の選択における複数要因の関連

分析結果より、説明対象と説明内容、説明メタ認知能力の要因間に、一次の交互作用、二次の交互作用が見られている。全体的な傾向として、説明メタ認知能力の高群において、成人を対象とした説明を行うとき、「①結果や因果関係の明確化」と「⑤十分な情報量」が重視されていることが示された。

【結論】

本調査を通して、説明対象と説明内容、また、説明メタ認知能力の高低によって、重視される説明方略の違いが見られることが示された。なお、これらの要因間において、説明方略の重要度評定値に交互作用が見られている。このことから、より現実的な場面を設定した追試が必要であろう。さらに、実際に被験者に説明を行わせる検証実験が必要と考えられる。